MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．７．２２　発行元
第 378 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

鉄道ミステリ海外編

第３６３号で『新幹線とミステリ』を取り上げた。日本には『鉄道ミステリ』が多数存在するが、海外となるとかなり数は少ない。今回は海外の「鉄道」をテーマにしたミステリ作品を取り上げてみようと考えた。

海外の鉄道事情とミステリ

日本の鉄道は時間に正確。だから「時刻表トリック」が成立する。海外の鉄道は大雑把に出来ている。「時刻表トリック」が成り立たない。だから海外ミステリにあまり鉄道は登場しない。アメリカは基本的に車社会で、大きな移動は飛行機が基本になってしまう。

このように国によって鉄道事情は大きく異なるようだ。ヨーロッパの客室の構造がコンパートメントという個室型が多いということを私が知ったのはモーリス・ルブランの『ルパンもの』からだった。コンパートメントは密室に近いので、その意味でのミステリ性はある。

クリスティには『青列車の秘密』や『パディントン発４時 50 分』などの鉄道ミステリがあるけれども、何と言っても『オリエント急行の殺人』が特別に有名すぎる。クロフツは鉄道が関わる作品をたくさん書いている。下には『列車の死』を取り上げたが『マギル卿最後の旅』『死の鉄路』も有名。イギリスでは短編に鉄道ミステリが多い。

NO.1 アガサ・クリスティ『オリエント急行の殺人』

「鉄道」と言えばこれ！　多くの人に知られているので解説はなし。

NO.4 アンドリュウ・ガーヴ『カックー線事件』

１９５３年の作品。私の手元にある本は１９８０年のハヤカワ・ミステリ文庫。ガーヴは『ヒルダよ眠れ』などで知られたイギリス作家。

元議員のエドワード・ラティマーがロンドンからエセックスの自宅へ帰ろうと列車に乗った時、たまたま乗り合わせた若い女性から暴行を受けそうになったとの訴えがあった。数日後、その女性が近くの海岸で死んでいるのが見つかり、エドワードは犯人として逮捕されてしまう。エドワードの息子たちとその婚約者がスキャンダル事件が冤罪であることを証明しようと立ち上がる。乗り物に関する謎解きの要素とガーヴ得意のサスペンスがうまくかみ合ったイギリスミステリらしい好作品。

NO.2 F・W・クロフツ『列車の死』

１９４６年の作品。私の手元にある本は１９８０年のハヤカワ・ミステリ文庫。クロフツは長年鉄道技師としての仕事に就いていた人で、本書には専門の人でないとわからない知識がたくさん登場してくる。クロフツの「鉄道」に関する集大成の本と言ってよい。

第二次世界大戦の中頃。イギリスはドイツ軍の猛攻を受け、各地で窮地に追い込まれていた。政府の首脳は世界各国の戦線に軍需品を送り込む作戦を考えた。結果、グレイト・サザーン鉄道を使ってレンティングからプリマスの港へ運ぶ極秘の貨物列車が計画されることになった。実行の日、貨物列車にわずかな故障が発生し、たまたま先行することになった旅客列車がある地点で爆破され、転覆する事態が発生した。このことから、作戦の計画が敵方に漏れていることが疑われ、スパイ組織を発見、壊滅させるためにフレンチ警部の捜査が開始されるという流れになる。第一部と第二部に分かれており、特に第一部の鉄道運行の細部が本書の読みどころでもある。戦争という非常事態の中での「列車の死」を見つめる作者の思いが伝わる作品である。

No.3 C・デイリー・キング『鉄路のオベリスト』

１９３４年の作品。本格ミステリ黄金期の代表的な鉄道ミステリ。私は光文社の雑誌『ＥＱ』の１９８１年１月号からの連載で読んだ。訳はなんと鮎川哲也。作者キングは１８９５年ニューヨーク生まれの人だが、ミステリ関係の著作は戦前に７作残されているだけで、戦後は小説は書かなくなった。その意味で「幻の名作」と呼ばれている作品である。

舞台はニューヨーク発サンフランシスコ行きの大陸横断列車トランスコンチネンタル特急。まあアメリカ版『オリエント急行』と理解してもらえれば良い。その開始列車の第一号。客のすべては招待客。各章の頭にニューヨーク、土曜の午後 10 時 30 分と駅と時間が示されるのがポイント。冒頭に地図や車両構成、車内の配置図なども載っている。次の日の早朝、銀行頭取のホッジスがプールで死んでいるのが発見された。（列車の中にプールという発想は日本では考えられないけれども。）　ニューヨーク市警のロード警部補が捜査を開始するが、前日の夜の口論した相手のことや、自殺説なども飛び出し…。シカゴに到着して、検視官が乗り込んでくると…。